

John Kevin Coyle : *Augustine's "De moribus ecclesiae
catholicae"—a study of the work, its composition
and its sources*

The University Press, Fribourg 1978 pp. XXXVI+466

小 阪 康 治

現在、アウグスティヌス研究の多くは、特定の主題のもとにアウグスティヌスの著作のさまざまな個所を再構成し、そこに一つの考えをみてゆこうとする手法をとっているようにおもわれる。むろんこれは正統的かつ有益な方法である。しかしこのような方法とともに、より基礎的な研究としてアウグスティヌスの著作の一書を、それが書かれた背景、時期、構成、用語法などの面から綿密に研究してみることもまた必要ではないかとおもわれる。そのようなつみ重ねがアウグスティヌス研究の発展に大きく寄与することはいうまでもないことであろう。このような考えをもっていたところ本書を手にしたので、以上のような立場から紹介、批評を行ってみたい。著者は Canadian Province of the Order of Saint Augustine に属しており、本書は学位論文として Othmar Perler 教授に提出されたものである。本書は三つの部分から成っている。はじめの 259 ページが内容研究の部分で、次の 35 ページがテキスト、残り 128 ページが注釈である。以下、とくに研究の部分を中心に興味深い個所をとりあげてみることにしたい。著者は、これまでのアウグスティヌス研究の一般的な傾向は、主題別にアウグスティヌスを分断することにあつたとし、それらの結果は多様ではあつたが、全体として実り少ないものであつたと考える。いくらか極端にすぎるとおもえるが著者の考えは明快ではある。著者は *De moribus ecclesiae catholicae* と *De moribus Manichaeorum* を別々の独立した著作とみなして、それぞれを *mor. I*, *mor. II* と略称し、両者をまとめていうときには *De moribus* とする。そしてこの意味での *mor. I* に注目するのである。著者がこの書に注目したのは、アウグスティヌスにおけるマニ教を研究しようとするならばまずこの書が考えられるからである。以上のような基本的立場の下に研究の部分は

次のように分けられている。Introduction, chap. I : Manichaeism, chap. II : The Beginning of Augustine's Response : "De moribus", chap. III : The Framework of The Response : "Rationem praecedat auctoritas", chap. IV : The Bible in Manichaean Asceticism and Augustine's Response, Excursus : The Source for the Digression on the Triune God Conclusion

第1章はマニ教の一般的な紹介で、これまでの研究の要約である。著者はマニ教に対するアウグスティヌスの論点を、神が変化するものではないこと、人間の自由意志の結果として道徳的悪が生じること、保つべき善の欠如としての悪、理性と権威、知識と信仰の関連にあった、とまとめている。第2章からが本書の中心部であるが、著作の時と場所は次のように考えられている。まず *retr.* では *mor. I* と *mor. II* の書かれた時と場所をローマ滞在時、つまり387年11月から388年8月としているが、これは諸家によっても疑問視されているとし、*mor. I* が書かれているあいだに *mor. II* は別の著作として考えられていて、公になったのが同じ時期であったとみている。*mor. I* が書きはじめられたのはモニカの死後で、それはアウグスティヌスが33歳のときであるから387年の11月13日より前である。もっとも早い時期を考えて母の死が夏の終りだとしても、387年の終りから388年の初めに書きはじめたと著者は考える。書き終りは *mor. I* の最後の31章から35章までがキリスト教徒の共同生活をとくにのべていることから、タガステでの共同生活が確立されたときであろうとし、*mor. I* の完成と *mor. II* に手を入れていた時期は388年の終りよりも早くはないとしている。この説は従来の説とほぼ同じであるが、これを基礎として *Gen. c. Man.* との関係を考察するあたりから独自の見解がみられる。すなわち *retr.* では著作は完成順ではなく、書きはじめた順序に並べられているという説によって、まずローマで *mor. I* を書きはじめ、途中関心が旧約に移ってタガステで *Gen. c. Man.* を公にし、ふたたび *mor. I* にもどったとして *De moribus* の公刊は389年のはじめと考える。すると *mor. I* のはじめの *In aliis libris* がこれまで考えられていた *Gen. c. Man.* ではなくなることになるが、著者はこの第1節を後からのつけ加えであるとみる。というのもアウグスティヌスは *quoniam* で著作をはじめることがあり、*De quantitate animae* や *De bono coniugali* にもそれはみられるからである。ここでは *mor. I* 第2節の *quoniam* がこれにあたり

sed は第1節とつなぐために加えたのであると著者は推測している。アウグスティヌスが著作のはじめの部分の後から加えたのではないかという疑問は、私のみどころでも『秩序論』のはじめの3節にもあてはまり、そのようなことをひんぱんに行っていたのかもしれない。こう考えると *Gen. c. Man.* I, 1, 1 の *alios libros nostros, quos adversus Manicheos edidimus* は *De moribus* ではなく、より以前の *Contra Academicos* のような、マニ教のことも考えながら書いている著作を指すとみるのが妥当だということになる。さらに *mor. I* の第31章から35章までは、旧約を扱わなくなっていること、新約も強調されてはいないこと、キリスト教の教理よりも実践に力を入れていることなどの点から、*mor. I* より *mor. II* に近く、*mor. I* は本来30章で終わっていたのではないかと推理している。この指摘はたしかに説得力があるようにおもわれる。Style and terminology で興味をひいたのは *mor. I* では *virtus* がふつうの意味 (11, 18) から哲学的意味 (11, 18) をへて、宗教的意味 (15, 25) へと進んでゆくという指摘や *disciplina* の用法として learning だけでなく self-control, correction に加えて *catholica* と結びあわされて、教会の教えと実践のシステムを示しているとする意見、また *mores* の意味はたんに *ethics, customs, morals* では狭すぎ *belief in practice* という訳がよいのではないかという考えなどである。そしてこの章の最後に全体の構成を節によって区分して、Introduction 1~3, I Catholic moral teaching : arguments from reason 4~12, II Catholic moral teaching : arguments from Scripture 13~56, Conclusion 57~64, Appendix : Catholic moral teaching in practice 65~80とし、さらに詳細な見出しをつけている。この区分は著者の徹底的な読みの結果であることが感じられ、*mor. I* を読む場合参考にすべき意見である。またマウリナ版によった熊谷氏の訳書とくらべて45節以後とくに解釈の違いがみられる。

第3章は理性と権威の関係という視点からのべられているが、ここではアンブロシウスがつねに批判的に新プラトン派に言及したことからすれば、その重要性を教えたのはむしろシンプリキアヌスであるという立場に立っているのが興味をひいたが、全体としてこれまでの研究の要約をでない感じである。第4章ではマニ教の聖書解釈に対するアウグスティヌスの反論の仕方が次のようにまとめられている。それはマニ教徒が書き換えられているとは考えない個所をまず引用し、つぎにその個

所を旧約と比較して両者が同じであり、したがって両者の神も同じであることを指摘する仕方である。しかしアウグスティヌスは教会が聖書を守り、マニ教がそれを攻撃しているから聖書についてのべるのであって、テキストの分析をしようとする気持はなく、自己の哲学的肯定の例証として引用するのである。重要なのは聖書の中に必要な生活の規則をみいだすことである。つぎに *mor. I* の聖書の引用が検討される。著者は *mor. I* のテキストを校訂中だそうで、テキストの決定版がないので仮のものとはしながら、当時の聖書の流布の状況からすれば、アウグスティヌスの引用した聖書はひとつの系列のもとはかぎらないというのが著者の基本的な考えである。たとえば *mor. I* を書いていた当時、パウロの手紙を二種類もっていたとして *Rom. 8:29* の引用が (13, 23) と (16, 29) では違うこと、同様に *I Cor. 6:13* の引用が (33, 71) と (35, 78) では違うことを指摘し、さらに *mor. II* を書いた時にはひとつの種類だけをとっていることを *Rom. 14:2-4* (*mor. I* 33, 71) (*mor. II* 14, 32) などをあげてのべている。また *mor. II* の引用は *mor. I* にくらべて *Vulgata* に近いとされる。さらに *Matt. 10:26* の引用 (17, 31) はどのラテン語聖書の写本にもみられないが、テルトゥリアヌスの *De paenitentia* 6,10 や *Pseudo-Ambrose* の *Sermo* 46,3 などにはみられ、そのような版があったのではないかと考えている。そして *mor. I, II* を書いた後 *Gen. c. Man.* を書くまでの間に新しい訳を手に入れたというこれまでの説は、先の著者の研究からも不可能であることになる。この章の結論としては、マニ教徒は肉の否定、旧約の否定、新しいキリスト教徒の中にいたユダヤ主義者の否定という点でパウロを好み、一方アウグスティヌスは、若いころの体験とパウロの体験を重ね、またとくに初期には哲学的な言葉使いに共鳴した、と考えている。「マタイによる福音書」はアフリカのマニ教徒にたしまれていた。またヨハネが少ないのはマニ教徒が用いなかったからではなくグノーシス的立場に攻撃されやすいからである。直接の引用がない「使徒行伝」と「ヘブル人への手紙」については、前者はマニ教が重視していなかったし、後者は旧約との関係で軽蔑されていたからであるとしている。第5章は禁欲主義についてである。結局、アウグスティヌスの考えは、救済には全面的な自己否定は必要ないこと、キリスト教徒の中にはより完全な生き方を探究する者がいるが、これは瞑想に集中するためか、弱い者への手本のためにそうするのである、とまと

められる。またヒエロニムスとの比較で、かれの *Epistola* には *monachus* や *monasterium* という言葉がみられるのに、アウグスティヌスは *mor. I* ではこれらの言葉をさけているようにみえるが、それはポンティキアヌスによってかれに開かれた社会では *monasterium* の代りに *diversorium* が、また *cella* の代りに *habitaculum* が用いられたからだと考えられている。

以上のように本書はマニ教と聖書を視点として *mor. I* を詳細に研究し、さらにその内蔵する問題を発展的にとらえようとしている。紹介すべき箇所はまだ多くあるが、ひとつの著作に集中したことにより論述は綿密なものとなっており、とくに第2、第4、第5章はそうである。しかし同時にそこにこの書の限界も存するのであって、著者の視点を設定したために、その結論部で *mor. I* がひとつの主題を扱っていない以上結論をまとめることはできず、各々の個所がすでに結論である、といわざるをえなくなっている。しかしアウグスティヌスは、とくに初期著作にみられるように、はっきりした意図をもって著述する場合が多いのであり、そうであるとするならこの *mor. I* においても著者の成果をふまえて、さらに深く統一的な視点を探究することもできるのではないかとおもわれるのである。

John Marenbon : *From the Circle of Alcuin to the
School of Auxerre: Logic, Theology and Philosophy
in the Early Middle Ages*

(Cambridge studies in medieval life and thought, Third series, vol. 15)

pp. ix+219, Cambridge University Press, 1981

金井多津子

本書は次のような構成を取っている。1. Aristotle's *Categories* and the problems of essence and the Universals: sources for early medieval philosophy, 2. Logic and theology at the court of Charlemagne, 3. Problems of the *Categories*, essence and the Universals in the work of John Scottus Eriugena and Ratramnus of Corbie, 4. The circle of John Scottus Eriugena, 5. Early